

国立移民博物館にみるイタリアのナショナル・アイデンティティの現在

和洋女子大学 秦泉寺友紀

1. 目的

移民の本格的な受け入れが 1990 年代以降と、フランスやドイツなど周辺のヨーロッパ諸国と比べると比較的最近のことで、国籍に関しては血統主義をとってきたイタリアだが、移民の定住が進み、2 世代も成長していくなかで、国籍に関する出生地主義が（無国籍児等の例外的ケースに関してではあるものの）採用され、近年はその本格的な導入が議論されつつある。本報告では、イタリアのナショナル・アイデンティティにおける「血統」的要素のゆくえと「血統」的要素がそこでなお維持されるとすれば、それがいかにしてはかれるのかを検討する。

2. 方法

検討にあたっての具体的な素材としては、イタリア統一 150 周年記念事業の一環として 2009 年に開設された「イタリア国立移民博物館」(Museo Nazionale Emigrazione Italiana) を取り上げる。この博物館が、「無名戦士の墓」や「リソルジメント博物館」等、近現代のイタリアにとって重要なモニュメントを備え、ローマの中心部に位置する「ヴィットリオ・エマヌエーレ 2 世 (イタリア王国の初代国王) 記念堂」内に設置されたことは、現在のイタリアで移民というテーマがもつ存在感の大きさを示す。本報告では、イタリア国立移民博物館の設立にいたる経緯やそれに関連する議論、在外イタリア系移民団体の同館への関わり、展示の構成や内容等を手がかりとして、そこから浮かび上がるイタリアのナショナル・アイデンティティの意味づけを検証する。

3. 結果・結論

19~20 世紀にかけてヨーロッパ最大の移民送り出し国であったイタリアからは、100 年間で約 2600 万人（いったん外国へ渡り、イタリアに帰国した者も含む）にのぼる人々が外国へと移住した。従来外国に渡りイタリア国籍を離脱した移民は、おもに個々のローカルな出身地域とのつながりにおいて、あるいは二級のイタリア人として想起されてきた。それに対し、20 世紀末からの大量の移民の到来、定住という新たな経験を背景に設立された国立移民博物館は、かつてイタリアから外国へ渡った移民を、出身地域の個別性を越えた、(当事者においては必ずしもそれと認識されてはいなかった) イタリア人として想起し直すとともに、国籍に関し総じてイタリアを離脱していった人々をイタリア史における重要なアクターとして新たに位置づけるという方向性をもつ。(国籍制度においては、イタリア移民の子孫には例外的に二重国籍を認めるというかたちで、国籍とナショナル・アイデンティティとの合致をはかる方策もとられている一方) この博物館から浮かび上がるのは、ナショナル・アイデンティティと国籍とを切り離して捉えるという方向性である。すなわちそのもとでは、国籍上はイタリアを離脱した人々に関しても、ナショナル・アイデンティティに関してはイタリア人として位置づけることで、ナショナル・アイデンティティにおける「血統」的要素の維持がはかれることになる。移民 2 世・3 世を想定した国籍に関する出生地主義の導入について、現状では世論もおおむね肯定的である一方でみられるこのような方向性は、ナショナル・アイデンティティのあり方をめぐり揺れるイタリアの現状を端的に示すものといえる。

文献

Colombo, Asher & Sciortino, Giuseppe, 2004, *Gli immigrati in Italia: Assimilati o esclusi: gli immigrati, gli italiani, le politiche*, Il Mulino.

Ministero degli Affari esteri, 2009, *Museo nazionale emigrazione italiana*, Gangemi editore.